

平成 27 年度第 3 回総合教育会議録

1 開催日時

平成 28 年 2 月 17 日 (水) 16 : 00 ~ 17 : 30

2 出席者

構成員	市 長	園田 裕史
	教 育 長	溝江 宏俊
	教育委員	永田 政信
	教育委員	江口 真由美
	教育委員	渡邊 敬
	教育委員	佐古 順子
	教育委員	村川 一恵

説明者	教 育 次 長	山下 健一郎		
	教育総務課長	西村 隆	図 書 館 長	鈴川 章子
	小学校給食センター所長	畑田 憲一	文化振興課長	富浦 保敏
	新図書館整備室長	松山 敬之	教育総務課係長	内野 一嗣
	学校教育課長	丹野 平三	こども未来部長	上野 真澄
	学校教育課参事	橋口 智秀	こども政策課長	川下 隆治
	社会教育課長	柳原 寅雄	こども家庭課長	山下 浩典

事務局	市 長 公 室 長	大槻 隆
	企画調整課課長補佐	山中 さと子
	企画調整課職員	堀田 亮輔

3 協議事項

- (1) 幼保小中連携による一貫教育
- (2) 中学校給食の早期実現と食育推進
- (3) グローカル人材の育成

4 経過

市長公室長 大槻 隆

定刻となりましたので、ただいまから平成 27 年度第 3 回総合教育会議を開催します。

私、本日の司会を務めます大村市市長公室長の大槻と申します。どうぞよろしく願いいたします。

新しく教育委員に就任された方が 3 名いらっしゃいますので、自己紹介をお願いできればと思います。よろしく願いいたします。

渡邊 敬 委員

こんにちは。昨年の 10 月から野口委員の後に教育委員になりまして、まだ数ヶ月でよくわかりませんけれども、勉強しながらやっていきたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。渡邊敬と申します。仕事は開業医で耳鼻咽喉科を開業しております。よろしく願いいたします。

佐古 順子 委員

佐古順子と申します。どうぞよろしく願いいたします。12 月より教育委員として皆様のご指導をいただきながら頑張っていきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

村川 一恵 委員

松原の村川一恵です。よろしく願いいたします。小学校 3 年生と保育園の年長に娘が通っています。活性化協議会の会長と地域活動をしています。母親としては半人前ですが頑張ります。よろしく願いいたします。

市長公室長 大槻 隆

はい。どうもありがとうございました。それでは市の職員で教育委員会以外の者を私の方から紹介させていただきます。

<職員紹介>

こども未来部長 上野 真澄
こども政策課長 川下 隆治
こども家庭課長 山下 浩典
企画調整課課長補佐 山中 さと子
企画調整課職員 堀田 亮輔

それではまずお手元の資料の確認をお願いいたします。次第、資料 1 出席者名簿、資料 2 配席図、資料 3 の協議資料①、②でございます。不足等ございましたら挙手をお願いいたします。

それでは、早速、次第に沿って進めて参りたいと思っております。まず、開会に当たりまして園田裕史大村市長がご挨拶を申し上げます

大村市長 園田 裕史

皆様、こんにちは。

本日は、平成 27 年度第 3 回総合教育会議に教育委員の皆様大変お忙しい中にご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。日頃から、大村市の教育の行政に対して様々なご意見・ご活動をいただいておりますことに心から感謝申し上げます。

私個人といたしましても 30 歳から市議会議員をさせていただきまして、昨年の 11 月に市長に就任いたしました。それ以前から、教育委員の皆様には日頃の教育活動に対して一緒に活動をやっていたいただいた方々、色々アドバイスをいただいた方々がいます。そういった中でこうやって意見交換をさせていただけるということを感じております。

本日、たまたま郡中学校の立志式が午前中にございまして、私も約 25 年ぶりに母校に行参りました。本当に素晴らしい教育行政を、これまで市教育委員会を中心に展開をして来られていることを感じております。先ほど村川さんからありましたが、私も中学校 1 年生と小学校 3 年生の子供を持つ父親でもあります。父親としても私も半人前でございます。だからこそ、こうやって現場にしながら大村市の教育の将来的なことをしっかりと考えていきたいと思っております。

昨年 4 月には地方教育行政の組織及び組合に関する法改正がっております。抜本的な法律の改正によって教育委員の皆様役割というのも非常に大きくなっていると思っております。今日は是非とも皆様、忌憚のないご意見をたくさんいただ

きまして、私の誕生日は明日でございますので、私もしっかり志を立てて頑張っていきたい、立志式での中学二年生と同じように思いを新たに頑張っていきたいと思っておりますので、自由闊達なご意見をよろしくお願いたします。以上です。

市長公室長 大槻 隆

はい。ありがとうございます。それでは、次第3「協議」にうつります。ここからは会議の議長を市長にお願いしたいと思いますですが皆様よろしいでしょうか。

一同

はい。

市長公室長 大槻 隆

それでは園田市長お願いたします。

大村市長 園田 裕史

はい。よろしくお願いたします。

それでは「教育課題に対する取り組みの方向性について」でございます。本日は、ここに記載の3項目です。

「①幼保小中連携による一貫教育」

「②中学校給食の早期実現と食育推進」

「③グローバル人材の育成」

ということ、この3点について意見交換を行いたいと思っています。

いずれも私もずっとこれまで議会において、そして市長になるために訴えてきた内容でもございます。これについてまずは第1点目「幼保小中連携による一貫教育」について説明者から説明をよろしくお願いたします。

こども政策課長 川下 隆治

こども政策課 川下と申します。よろしくお願いたします。

まずは幼保小について私から説明させていただきたいと思えます。資料3-1ということで、市内の保育園・幼稚園等の幼保小連携に関するアンケート調査【概要】が皆様のお手元にあるかと思えます。こちらの方から簡単にご説明させていただければと思えます。

昨年末に、実際に市内の教育・保育施設が幼保小連携をどういうふうに進めているのか把握しようということでアンケートをとらせていただきました。回収は85%程度でした。アンケート結果としまして、幼保小連携は実際は9割ほどは連携していますよという結果が出ております。

ただし、内容をつぶさに見ていきますと、やはり各学校、施設間、また教師等によって取り組みにかなり濃淡があるなというのが実際でございます。これまでこの幼保小連携というのは、特段大きな方針を持って体系的に進めてきたということはございませんでしたので、各施設毎にバラバラな対応をしてきているということがございます。今後そういった取り組みが必要なのかな、ということが、今回のアンケートで浮き彫りになってきたと思っております。

これにつきましては、第二期大村市教育振興基本計画の中でも、この幼保小連携、特に学びの成長の一貫性を持った支援が必要だろう、という方向性の中、そして、今後のまちづくり戦略の中でも「子育てしやすいまちづくり」を大きな柱のひとつとしまして、幼児教育から義務教育までの連携をということでひとつの大きなポイントになってございます。こういった方向に従いまして、今回のアンケートの内容を踏まえまして、じっくり教育委員さんと一緒に勉強しながら、今後具体的に進めていきたいと考えております。

簡単ではございますが、こども政策課からは以上です。

学校教育課長 丹野 平三

引き続きまして学校教育課 丹野でございます。説明させていただきます。資料は3-2になります。

当市は平成18年度から資料の右下にありますように2学期制度のもとで学力向上対策や不登校対策をはじめとして、学校と一体となった施策の展開や教育活動を進め、特色ある学校づくり、学校教育の充実に努めてきています。

全ての大村市内の子ども達が心豊かにたくまし

く夢を抱いて成長してほしいと願うことは、ここにおられる皆様をはじめ全ての市民が願うものであると思っております。

そうした中で小中連携一貫教育は今後様々な学校の課題を解決あるいは緩和し、本市の豊かな学力と確かな育ちを育んでいくうえで大変重要な手段の一つと考えております。

具体的には左右に矢印がございますけれども、左側の矢印は義務教育の9年間を縦につなぐという意識で見ただけであればと思います。義務教育9年間を通して継続的に子ども達が学びを深めていきます。その学びの連続性と様々な友達と出会い、生活を共にしていく中で育っていく育ちの連続性というのが考えられるところでございます。

また右側の矢印をご覧ください。学校を取り巻く環境として、保護者や地域、様々な支援者がいらっしゃいます。すなわち横のつながり、横の連携というのも大切にしていかなければならないかなと思っております。

これまでは図の上の方に円柱形で設けておりますように大村市内には6中学校区ございまして、それぞれの中学校区毎に特色ある連携活動を進めてきております。具体的には小・中間の入学してくる子ども達の児童生徒の情報を共有しあったり、あるいは年数回の授業参観を教師同士が行ったりするなどの生徒指導連絡会等の連携を行っているところでございます。また、萱瀬中学校区においては小・中間で同じ運動会を実施するなど行事の連携もなされているところでございます。

また、不登校対策、学力対策を進めてきたと申し上げましたけれども、学力調査の伸び悩みであるとか中学校において不登校生徒が増加傾向にあるなど近々の教育課題も浮き彫りになってきているところでございまして、これらの対策に取り組んでいくために来年度から行う予定にしているものを、資料の真ん中の台形で囲んでおります中に紹介しております。

一つは、小中連携活性化プロジェクトチームと

いうものを立ち上げて、連携の在り方や今後大村市内における小中一貫教育の方向性について議論をいただく場としていきたいと考えているところが一点でございます。

また、学力向上対策としては先進県への教職員の視察を行いたいというものや、不登校対策では新たに教育相談員を配置して、様々な学校の課題に迅速に対応していく環境を整えていきたいと考えているところでございます。

簡単ではございますが以上で説明を終わります。

大村市長 園田 裕史

はい。ありがとうございます。

それでは今説明がありました課題についてご意見をいただきたいと思っております。2点ありまして、こども政策課長と学校教育課長から説明がありましたが、まずは資料3-1のこども政策課長からご説明があった部分に関して皆様のご意見等々お聞きしたいと思っておりますが、いかがでしょうか。

村川 一恵 委員

資料3-1の調査対象の幼稚園・保育園・こども園とありますけれども、認可外は含まれないんですね。

こども政策課長 川下 隆治

はい。

村川 一恵 委員

認可外の割合とか、保育園・幼稚園に通っていない子の割合が何%くらいあるのかなと思いました。

こども政策課長 川下 隆治

お答えいたします。

認可外につきましては、現在大村市内に1園です。いわゆる認可外保育所で、事業所内保育所というものも聞きますが、いわゆる認可外というのは1園となります。休園中を含めると2園ということになります。

実際に通っているお子さんということになりますけれども、6歳まででほしい1歳毎に1,000人ずつおりますので、6歳までが6,000人というこ

とになってございます。その内保育所等に通われているお子様が2,900人、幼稚園等に通われているお子様が1,000人前後になりますので、ほぼ2/3ぐらいがだいたい施設系の教育・保育をお受けられていると考えられます。

村川 一恵 委員

ありがとうございます。ということは、この中には通っていない2,000人は含まれていないということになりますよね。

こども政策課長 川下 隆治

はい。そういうことになります。

大村市長 園田 裕史

他に皆さんからないでしょうか。内容の確認でもいいですし、このアンケート調査結果についてご意見等いただければと思います。

村川 一恵 委員

確かにここにあるように幼稚園・保育園の先生は1年生になった後の友達をすごく心配しています。上の子と一緒に保育園に迎えに行くと、すぐ声をかけてくれたりします。運動会になれば、運動会でどういうふうに行っているのかなと小学校に見学に来てくれたりしてくださっています。

先生達にとっても小学校でどういうふうに自分の子ども達が育っているのかとか、幼稚園・保育園で教えたことが活かされているのかなとか、友達と一緒にうまくいっているのかなというのをすごく気にされておられるので、もっと連携を密にするのはすごく大切なことだと思います。

よく先生が言われるのは、幼児期にどういう教育をしたかという、幼児期がどうだったかということで、小学校の先生も知りたいということもあるので、小学校の先生達からしてみると小さいときのどういう育ち方だったかということ、何か問題のある子どもに対してはどういう状況だったかというのは小学校の先生にとっても今後連携を深めていくことが大切なのかなと思っています。

ただ、気になるのが保育園や幼稚園に行っていない子どもです。そこをどう埋め合わせをし

ていくのかというところが気になります。

こども政策課長 川下 隆治

はい。ありがとうございます。

現時点でそういった情報として、色々な教育・保育施設の方で個人の様々な状態、記録を当然とって行くわけですが、それをまとめたものを小学校の方へ渡していくということで通常やっています。そうしますと在宅のお子さんの場合は、そういった記録がないというところがございまして、そこは実際は、新年度で小学校での面談などで対応されているという状況かと思えます。

そういったところまで、そういった情報、きちんと生活状況をこういった教育・保育施設の方でデータとしてあるので、それをまずはきちんとつなげていくことをやっていこうということになります。

対処については、どういうふうな対応かというのは、なかなか今妙案が浮かぶわけではないのですが、確かにおっしゃるとおり、通っていないお子さんはどうするのかということで、どういう関わり方があるのかなということも含めて、たしかに今後の課題というか、そういう部分があるのかもしれないと思います。

村川 一恵 委員

通っていない子ども達のことも考えてほしいです。保育園や幼稚園になじめないとか行けないという子はもしかしたら発達障害の可能性とかも考えられるので、そういう子こそおそらく小学校についていけないということもありますよね。だからそういう子たちの埋め合わせをするものが必要だと思います。

こども政策課長 川下 隆治

はい。今おっしゃっていた通り、特に病院等につながっているお子様、たとえば施設型の教育・保育につながってなくて、たとえば療育機関に関わっている方につきましては、小学校の方との情報のやりとりは実際にあるようですので、そういったつながりのあるお子様については、比較的つ

なげていけている状況はあるのかなと思っており
ます。ただ、そうではない方々がどうなるかとい
うのは、なかなかわかりにくいというのは確かに
あるのかなと考えております。

ただそこは、今在宅保育の中で地域子育て支援
センターといったところに通われているお子様は、
親御さんが気になる場合にそのセンターをやっ
ている園を通して、そういったこともありうると
は思っております。それよりもこれまでの場合で
いきますと、実際は様々な幼保小連携の中で気
になる部分とか、そういったところの中で対応等
がでてくるのかなと考えております。

こども未来部長 上野 真澄

就学前の子ども達、0歳児～5歳児までですけれ
ども、5歳児、つまり年齢が高くなるほど教育施
設・保育施設に通っている率が高く、95%とかに
なってきます。ただ、0歳児、1歳児、2歳児のよ
うに小さいほど幼稚園とかに通っている率が少な
いということになります。

それでまず在宅の通っていない子ども達をどう
するかということで、大村市は保健指導といいま
すか、1歳半検診、3歳児検診、そういった節目節
目の検診を行うということで、そういった中で支
援が必要ではないかというお子様につきましては、
保護者の皆さんと相談していろんなことばの相談
室、心の相談室とかいろんな教室に通っていただ
く。それと市内8箇所あります子育ての支援セン
ターそこに通っていただく。そういう形で育ちを
支援して、それで円滑に小1に進めるようにする。

やはりどうしても小1の壁というのはあるかと
思います。この小1の壁が少しなめらかに、登り
やすくなっていくとか、降りたくないようだと
かでなめらかに移っていけるような幼保小の連携
というのが、在宅を含め今後積極的に取り組んで参
りたいと考えております。

村川 一恵 委員

ありがとうございます。

大村市長 園田 裕史

そういった幼保小、学校教育課からあった説明
というのがこの横長の資料になりますけれども、
ここが話が出てきたところですので、皆様からご
意見をいただきたいと思っております。

先ほど村川委員からあった幼保から小学校へつ
ながる、そこで支援が必要ではないかという子ど
も達の心を大事にしていきたいというのもでき
ましたけど、現場での数を抑えておりましたし、
教育委員としてこれまでも体験していただいで
いる江口委員から、現場としても言ってもらいた
いですし、これを進めていく上で重要なところ
ってこういうところかなというのがあれば言っ
ていただきたいなと思っておりますが、いかが
でしょうか。

江口 真由美 委員

3年前まで補助員として低学年補助、要配慮児
補助、特別支援学級補助をしておりました。私
はそもそもは幼稚園教諭をしておりましたので、
幼稚園の年長児を見てきました。そして幼稚園
としての最高年齢でしっかりしているなと思
いながら送り出します。小学1年生になった
など。他の方とは見方が違うかもしれませんが、
1年生ということでこんなに違うのかと、き
っと現場の幼稚園の先生は思うんじゃない
かなと思います。小学校の1年生になった
ときの子ども達の様子というのは、気持ち
の落ち着きとかを含めて、あとは発達障
害とか発達障害まではいかないけど周
りとなじめなかったり、登校をしぶる
ようになったりという子ども達につ
いて、それを担任の先生が1人で見て
いられるというところの大変さとかつ
らさはすごくあると思います。

幼保小連携の目的というか、意味という
のがそういうところのつなぎ、先ほど
ありましたけれども柔軟につなげてい
くということ、あと幼児教育の重要
性というのを考えていきますと、こ
のアンケート結果では1年生とは交
流しているということですが、後
の部分での交流がやはりどうしても
少なくなっている。先生方の要望
として、

たとえばもっと子ども達のことをこちらも知りたいし、あちらも知りたいであろうということでの交流というのを望んでいらっしゃるのかなと思います。

大村市では前教育委員の野口先生がのびのびファイルというのを進めてくださっていただいて、それは外に出す部分でという気持ちもあるのでしょうけれども、母親自身が気づいていく、定期的に記録をつけていくことで気づいていくということで、一番のネックになっている保護者が自分の子どもが発達障害者などなんてことを言うんだというところの壁をすなりと、自分がよりよい子どもの教育環境を与えてやるという意味で保護者が気づくということが大事だと思います。そこら辺が、先ほどの家庭を訪問されるということを含めて、うまく機能すればいいなと思います。他の郡市と比べれば大村市はすごく先進的なことをしているのではないかなと思っておりませんが、小1になった瞬間にどうしてこんなになるんだろうというのは今までもありました。ただ、それも含めて補助員の配置をしていて、そこのところは手厚く、今言ったような子ども達に対応して育てていくという周りの暖かい目というのは大村市はすごくあるのではないかなということは思っております。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。

今、江口委員から現場の声もいただいてご意見をいただきましたが、皆さんからこのテーマについていろんなご意見あればいただきたいのですが、何かありますでしょうか。

渡邊 敬 委員

私も特別、医療で小児科の先生のように見ていたわけではないので、とりとめのないことになりそうですけれども、自分の子どもを考えた場合、3年間保育に行き、3年間幼稚園に行き、孫も3年間行きということを考えますと、私立幼稚園ですけども非常にありがたいと言いますか、小学校に入る前の準備を十分させてもらっているかなと

思っています。外から見ているから間違っているかもしれませんが、成長しているなということはいつも感じていました。

江口委員が経験から言われて小学校1年に入られる時にどうしてこうなんだろうというギャップといったところがあるとおっしゃられました。やはりスムーズな連携がいてないのかなと思いますし、保育園・幼稚園各種ありますが、小学校・中学校のような教育のレシピというか指針というのがないようですけども、どうなんでしょうか。社会情勢が預けるといってのを積極的にやられる、外に出すという意味の幼保教育、そういうのもあると思いますけれども、連携することによって課題が出てくると思うし、さらに教育面でのアップがあるんじゃないかと思います。まとまりがつかいませんけれども、感想と疑問点です。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。

永田 政信 委員

なめらかな幼保小の接続というのはすごく大事だと思います。幼稚園・保育園では子ども達が遊びの中から先生と四六時中一緒にいて学んでいくという、そして小学校に入ったらやはり時間に制限された教科がある。そして守るべきことも言われ、先生達と向き合う。そういうギャップというのは解消する必要があると思いますけれども、すべてなくしてしまうのではなく、子どもがポンと超えていくということも大事なんですよね。やはりちょっと困難を超えていってやっとな上の学校に上がったという、小学生というあこがれに乗って上がったという、そこに至ったという経験も大事ですよね。100%とるのではなくて、小学校のやつを少し持って行って、階段を超えやすいようにするというそういうのが大事なのではないかなと思います。

それと先ほども出ましたけれども、今まで幼稚園とかの年長さんでトップでいたのが、一番下に入ってしまった今度は逆に最年少になってしまう

ということになるから、その辺も含めて上手につないでいく必要があるのかなと思います。どうしたらいいかという表現は難しいのですが、そう思います。まとまってなかったですね。失礼します。

大村市長 園田 裕史

はい。ありがとうございました。

元々、幼保小中一貫連携教育というのは私はずっと議員をやっていました時から、この題目で大村市の教育に対してご提案を申し上げてきました。その背景というのはこの学校教育課が作っている横長の資料ですけれども、これは非常にいい資料で、課長はじめ作っていただいているんですけれども、分かりやすい資料です。

0～15歳までを考える時に自我が芽生える10歳という一つのポイント、そして思春期を迎える中学生というところの連携をなめらかにつないでいくことがいかに重要かという視点を私も持っています。幼稚園・保育園の中で教えていただいたことを小学校につなげて、中学校につなげていく。

長崎でいうといろんな事件・問題がこれまでありました。そういう中で、身体もですけれども心のフォローアップをしっかりとやっていかなければならない。この資料の中にもありますように、やはり小中の連携はもちろんですけれども、幼保をそこに加えて、校区毎で見えていくという流れを作っていくといろんな意見交換できる。早い段階で支援が必要な子ども達をキャッチできる、そこにもつながると思っています。

これは去年の平成27年に新たな第二期大村市教育振興基本計画を策定されていますから、今から具体的に取り組んでいくことですので、ぜひ、今、本日の意見交換だけではなく今後具体的に動いていくという中で委員の皆様にもご意見をいただきたいと思っています。

加えて、一連の意図があって幼保小中一貫教育連携を書いておりますが、先ほどからあるように地域での子ども達の交流というのは数値的にも40数%ということで地域でなかなか大村市の

子ども達は受け入れられていないというデータも出ていますから、ここにいらっしゃる地域のいろんな方に子ども達を地域にまた取り込んでいくという形も必要でしょうし、校区の中でどんな連携を図っていったらいいか、それを一つのシートにまとめていくということも重要だと思っています。今、学校教育課ですごく素敵なシートを作っているから、これをこども未来部も絡めた形で一体となって今後フォローしていきたいと思っていますので、また今後もご意見を聞かせていただければと思います。

それでは3項目ありますので、2点目の「②中学校給食の早期実現と食育推進」について説明者から説明をお願いします。

小学校給食センター所長 畑田 憲一

給食センターの畑田と申します。よろしくお願ひします。

まずはじめに現在の長崎市の状況でございますが、本市の学校給食は小学校は主食とおかずと牛乳を提供する完全給食方式でございまして、森園にあります給食センターから市内の小学校15校、4つの幼稚園合わせて約7,000食の給食を調理しております。一方、中学校は牛乳のみを提供するミルク給食を行っております。

長崎県内の状況を見ますと、小学校と中学校、全市町で完全給食となっております。完全給食が未実施であるのは大村市のみとなっております。ですので、本市におきましても以前から早期に中学校給食を開始してほしいとの要望は上がっているという状況でございます。

中学校の完全実施に向けましては、学校給食法に規定されております、高度な衛生管理基準を遵守し、安全・安心な給食を子ども達へ毎日届けるためには、市が運営する給食センター方式が最適と考えまして、センターの建設用地につきましては現在の小学校給食センターの隣地に確保しているところです。建設事業費につきましては、本工事費に約15億円、用地取得に1億4,000万円、そ

の他各学校の配膳室の建設等で総額約 19 億円を見込んでおります。また、給食を開始した場合には毎年運営費として 1 億 5 千万円程かかるということで、このように建設それからその後の運営に多額の費用を要することから、未だ着手には至っていないというところでございます。現在、早期実現に向けて財源の確保やセンターの建設手法、それから事業のコスト縮減等について検討をしているところでございます。

お手元の資料で、中学校給食のアンケート結果というのがございますので、そちらをご覧ください。中学校の給食を開始するにあたりまして、保護者それから児童生徒がどのような考えを持っているかということの調査ということで、昨年 10 月に実施いたしました。小学校 5 年生から中学校 3 年生までの全児童生徒、それから中学校・小学校・幼稚園・こども園・保育所・保育園、これは私立を含みますけれども、こちらの全保護者を対象といたしまして、中学校給食に対してのアンケートということで行っております。

調査項目につきましては、学校給食の実施のみならず、食育や各家庭の食の状況など多岐に渡る項目になっております。この中で、中学校給食に関しましては、アンケートの 2 ページ目、問 8 をご覧ください。

問 8 で「本市は中学校給食実施に向けて取組を進めておりますが、どう思われますか？」ということで、「早期に進めるべき」が 64%、「どちらかといえば早期に」というのが 15.4%、合わせまして保護者の間では約 8 割の方が実施をしていただきたいというふうに考えております。一方で、慎重にという意見も 12%ほどございました。これも事実でございます。

児童生徒ですが、問 9「中学校でも給食はあったほうがよいと思いますか？」という質問に対して、児童生徒の方は「あった方がよい」、「どちらでも良い」、「ないほうが良い」がそれぞれ約 30%と意見が分かれております。この中で小学生の方

は今給食をとられているものですから、弁当に対してあこがれもございまして、ないほうが良いよりも若干高くなっております。逆に中学生の方は今弁当なので、前の給食がよかったかなという思いがあって、若干給食のほうが良いなという結果が出ております。

中学校の給食につきましては、多様な食事を組み合わせさせて栄養バランスのとれた安全・安心な食事を提供し、成長期にある生徒の健康の保持増進と体力向上に大きな効力を発すること、それから食事に関する正しい知識や望ましい食習慣を養うなど食育推進に寄与できることから、アンケートの結果を踏まえながら、よりよい中学校給食の早期実現と食育推進に努めていきたいと考えております。説明は以上でございます。

大村市長 園田 裕史

はい。ありがとうございます。

では今説明がありました課題につきまして、皆様のご意見をお伺いしたいと思います。率直に慎重がいいよとか、やめた方がいいとかお話をいただければと思います。

永田 政信 委員

放虎原小学校のふれあい給食で市長とお会いしてお伺いしましたけれども、その時に市長のおっしゃったことが頭に残っています。「給食の時は皆いい笑顔をしているよね。算数や国語の勉強をするときの顔と全然違うよね。」と言われました。私は給食を食べるといのは皆が全て同じようなものでありたいなと思っております。やはり教育を受ける均等性というか権利というのはやはり一緒でありたいなと思っております。

県下を見たときに大村だけがまだですよ。教室の中でも本当はお友達と食べたときに、食べ物と食のとり方が違う子ども達がおりますよね。そういったことをなくすためにも、皆がその時間帯だけでも同じような食事をとって、にこやかな雰囲気の中でそういったことができたかなと思っております。そういったことをしていくためには、

給食を進めてもらいたいなと思っているところでございます。

給食のいいところというのは、先ほど畑田さんの方から、給食は生きた教材ということで色々お話がありましたけれども、そういったことが培われていくのではないかなと思います。色々アンケートの中を見ても、給食をとっている子ども達の食に対する関心というのは中学生よりも意外と高かったんですね。そういった給食を使った教材を使いながら、栄養士の先生や養護の先生や担任の先生の教えが身についているのかなと思います。

食育というのは知育・徳育・体育、生きていく上での基礎になる部分ですから、しっかりお勉強していただいて、自分たちが大人になったときに今度は自分の子どもに対して、いい食習慣を見に付けさせるというようなリングになっていくのではないだろうかなと思います。

大村市長 園田 裕史

はい。ありがとうございます。現場からも感じられるようなご意見であったと思います。

今あったご意見もふまえて、女性の視点とかそういうところから、佐古委員、給食に対してでございますでしょうか。

佐古 順子 委員

給食というのはとても栄養価もきちんとされていますし、まず温かいものを食べられ、冷たい牛乳は冷たく食べられるというのはとてもありがたいことだと思っております。現在は中食とか外食とかそういう食産業もずいぶん発達しています。これは進めて行くべきではないかなと思っております。

ただ一つだけとても気になっているところがあって、答えがどうなのかは分からないのですが、全国各地でセンター方式にしたけれどもやはりまた自校方式に戻したところもあるみたいですので、建設費とか、世の中もどんどん変わっていきますので、10年先、20年先にどちらの方がいいのかなというのは少し調査する必要があると思

います。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。

そうですね。大村市でも給食の議論がずっとあっている中で、やはり自校がいいという声があります。具体的に、財政的な部分で自校とセンターでどのくらい維持費がかかるのか過去に試算をしています。

小学校給食センター所長 畑田 憲一

今、手元に試算した資料がないのですが、一つは自校で作るためにはそれぞれの敷地が必要であることというのは、一番大きなネックということでございました。自校方式がいいというのは近いところから着くので給食時間が短くなるということもございます。よく言われるのが調理員さんの顔が見えないとか、子ども達に給食を作る場が見えないということで、そういうところはやはりセンター方式の問題とされております。私どもとしてはセンター方式で行う場合もそういうことがないように、子ども達にビデオを撮って現場の様子を見せるとか、あるいは子ども達に来てもらうとか、この前実施したような小学校で自分たちで作った作物、萱瀬で作ったお米、竹松小学校で作ったにんじん、これを給食センターで調理をして、もう一回自分たちの竹松小学校、萱瀬小学校に戻して食べてもらうといったそういう身近に給食を感じてもらえるような取組に努めております。

自校方式のいいところ、センター方式のいいところをミックスしながら、センター方式でも運営ができるのかな、また運営していきたいと考えております。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。

今、色々ご意見があっておりますけれども、基本的にはやるべきではないかという意見交換があっているのですが、ただ、自由に意見をいただきたいので、「いやいや、ちょっと待て」とか「どう

かな」というご意見が委員さんの中からあっても、それもまたいいと思います。それを含めていかがですか。こういうところが心配だなとかございませんでしょうか。

江口 真由美 委員

前回の総合教育会議でも言ったのですが、私は卒業してしまったのですが、当時思っていたことを正直に申し上げますと、中学校に給食がないのはどうしてなのかなと思っておりました。でも、卒業してからよくよく振り返って考えてみると、親子の会話、ひとつひとつは小さなことなのですが、毎日の積み重ねで親子の会話がありました。「お弁当おいしかったよ」というような感謝の気持ちと一緒に弁当箱を返すという、毎日毎日の小さな積み重ねがなんかこう暖かいものを生むのではないのかということを考えてときに、安易に保護者の手間が省けるからという理由だけでそれを推進していったらいけないのではないかなとは思っていました。

ただし、食育の観点からも、またアンケートの結果を見て健気だなと思ったのですが、児童生徒が「中学校給食に期待するものを3つまで選んで○を付けてください」というのが問10にあります。そこで、子どもが「家庭でのお弁当作りの負担が少なくなる」ということを挙げています。35%くらいありますので、健気だなと、親のことをよく考えてくれているんだなと考えると、もっと親の方が食育に関心を持たないといけないんだろうなというのを逆にちょっと思いました。

中学校給食を推進するに当たっては、食育というところを基本に教育の一環なんだということを基本に、保護者とも市とか教育委員とか、朝ご飯をしっかりと食べさせましょうという方に進めて行ったらいいのではないかなと思います。

大村市長 園田 裕史

貴重なご意見ありがとうございます。

今、江口委員がご指摘された部分は、この前私も参加した食育推進会議という中でもありました。

市内の各教育に関する方々が集まった会議で、教育現場の学校長、校長会の会長がお見えになってそういった会議があったのですが、そこでも話題に上がったのが朝食を食べない子どもとか、こういったアンケートの結果をもって、子どもの食に対する意見がありました。そこで皆さんだいたい合意形成ができていたのは、中学校給食を進めていくという中で同時に食育をちゃんと推進して知っていただく機会にこの中学校給食を位置づけようじゃないかということでした。

先ほど永田委員からもありましたけれども、本当にそういう部分をちゃんとやらないといけないと思っております。私も給食、給食とずっと言ってきた人間として、その部分はやはりちゃんと重要に捉えて取り組んで行かないといけない。お母さん達は早く給食にしてと言うけれども、地域の子供達は「給食いややし」とか「市長、給食にせんでよ」と言います。ところがお母さんと子どもでそこで会話が生まれる。「なんで給食にして」と言うのか。そこで手間が省けるだけではなくて、どんな理由で給食になったという部分を子どもにも親御さんにも伝えていくきっかけにしないといけないだろうなと思っております。

皆さんからも、給食について自由に意見をお願いします。

村川 一恵 委員

同じ保護者の人たちから色々聞いていると、子どもがどうしても残してしまうから食べるものを入れてしまうということがあります。唐揚げとかお肉が多かったり、子どもが好きそうなおかずでまとめてしまうということを心配していました。

そこに反映するように、もしかすると子ども達は食べたくないものまで食べないといけなくなるという好き嫌いが言えなくなるというところもあると思いますが、やはりそれでは栄養のバランスがとれないこともあるということもお母さん達も言われていて、だから給食にすることで栄養バランスのとれたものをしっかりと食べさせる。それ

が平等な義務教育なんだろうなと色々聞いていたら思いました。

アンケートにあるお昼を食べない子が数名あるんですけども、これはたぶん学校で書いたと思いますが、先生が見るからとりあえず食べていると書いておこうというものがあって、この数字はもしかするともっと多いかもしれないと思います。そういうふうには栄養がとれていない子もあるかもしれない。となると、中学校給食を進めてほしいなと思いました。

所得格差だったり、お母さんがすごく忙しくて作れなかったり、私はよくあったのですがお昼ご飯代をもらい忘れて食べられなかったというのが高校とか中学でもあったので、そういうことがないようにしたいなと思います。その点で早く進んでほしいです。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。

大変貴重な意見だなと思います。皆さんから他にないでしょうか。

先ほど村川委員からもありましたし、冒頭に永田委員からもありましたけれども、おそらく大村市だけに限らずなかなか家庭の環境、状況、もしかしたらいろいろな問題があって、お昼食べれない、夜もずっと食べてない、朝も食べてないという子達もあるかもしれない。そういった時に、永田委員も言われましたが、均等に一日に一回であっても栄養価の高い食事をとれるというそういったことも給食の大きな役割ではないかなと思いますし、そういったところをしっかりと見ながら家庭教育に対してもアプローチできればいいのかなと思います。

永田委員、そこらへんで現場とかでもそんな現象とかありましたか。食事や給食に関して。

永田 政信 委員

私は小学校でしたので。

大村市長 園田 裕史

小学校で給食の時間に子ども達が家ではあんま

り食べてないとか、そういう会話をされたりとか、そういった現実的なことがあったりとか、そこで良い案がもしあったら教えていただければと思いますけれども。

永田 政信 委員

本当に様々な子ども達がおりますので、それであきらかに食事がとれなくてお腹を空かして学校に来ているなという子も見受けられるし、それが理由で学校を休むという子もなかにはおります。そういった子ども達を担当がカバーをする風景を見ました。

その担任の先生は、福井先生といますけれども、朝の6時くらいに電話をかけられて、「朝7時に家に行くからちゃんと準備をしておかんばいかんよ」と声をかけられていたし、わざわざ朝おにぎりを作って学校に行っておられました。そして学校でその子と一緒に、先生も一緒にそこで食べられるんですよ。朝食は家でとってきておられるとは思いますが、そういった配慮ですね。そういったことがありました。

私達には家庭の中は具体的にはわかりませんが、子ども達の言葉であるとか子ども達の態度であるとか、そういったことからこうじゃないかなということが伺い知ることができたことがありました。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。

本当にその部分を含めていろんな意味で給食の位置づけをしっかりと考えて、導入に向けていかなければいけないなと思っております。これについても本当に1点目と同じですが、具体的に様々な形で進めていくところでございますので、今後もしもいろいろなご意見を聞かせていただければと思います。よろしくお願いします。

次に「③グローバル人材の育成」についてですが、これにつきましては、私の考えを述べさせていただきます。皆様からご意見をいただければと思います。

グローバル人材の育成と書いてありますが、これは私が議員になった時に前々教育長の本下教育長がグローバルな視点で子ども達を育てていかなければいけないということを言われておりました、非常に印象に残っておりました。世界を見た、世界で活躍するグローバルな人材を育成していくためには、ローカルとしての地域社会をしっかりと知らなければいけない。郷土愛を育んだ教育をしていかなければ世界を見ることはできないということをおっしゃっておりました。

昨年の4月に発表された大村市第二期大村市教育基本計画の中にも大村市の教育の方向性として、郷土愛を育む地域教育と確かな学力という形で記述があります。この確かな学力というのは何も点数を上げるということではなくて、どういった形で自分が生きていくのかということをしかりと定めたという計画書になっております。そういったことからこのグローバルな人材育成ということで、私は重要な視点だということでは施策を進めてまいりたいという思いがございます。

先般、教育次長と一緒に長崎大学の経済学部の瓊林会が主催する英語教育についてのシンポジウムがあり行ってきました。私も恥ずかしながら壇上に立たせていただきまして、シンポジストとして意見を述べさせていただきました。

大村市がこれまで前松本市長の時から取り組んでこられたALTを中心とした英語教育、国際教育というのは評価が高いものがございます。具体的には平成6年度からALTの授業に取り組んで、そのときは約1名からスタートしています。それが今では全21校に対して13名のALTを配置している。これは県内における学校1校に対してALTという英語の補助員をどのくらい配置しているかと言え、0.62校に対して配置をしているということになります。つまり大村市に関してはほぼ1に近い形で配置できているということで、これは県内トップの数字です。こういった形で英語教育に対しても力を入れてきた背景が本市にはあ

ります。だからこそ今後グローバルな視点を持って、またローカルに対して取り組んでいくために、これまで大村市が郷土史クラブということを中心に郷土愛を育む教育環境、そういった取り組みを実施してきたことと合わせて、グローバルな人材育成をしていきたいということがあります。

そこで重要なのが、英語に限らず国際交流を図っていく、郷土愛を育てていくというときに、やはり地域協力というものに視点をおきたいと思っています。これまで大村市は健全協やいろんな形の中で地域の教育体制というのは非常に充実してきたということがあると私も思っています。ところが先般行われたアンケートでは、子ども達に地域の行事に参加をしていますかというアンケートに対しては約40%位の子ども達しか参加をしていないという結果でした。これをどうやって地域に子ども達を連れ出すというか、誘い込むことができるのか。そこでいろんな立場の大人と触れ合うことができるのか。そして将来子ども達が何をしておはんを食べて生きていくのか。その力を身につけていくというのが本当の意味で確かな学力だと思っております。

そういったところで私も地域教育日本一ということ掲げていますし、ぜひ地域教育に対してこういったアプローチがあるのではないかと、また国際交流ということに対してこういったところを持っていったらどうかなど、幅広く皆様からご意見いただきたいと思っておりますがいかがでしょうか。

村川 一恵 委員

私が教育委員になったという一つの中に松原の地域による子ども達の教育をやってきたというのがあったと思います。まず、どうしてやるきっかけになったかと言ったら、東日本大震災で地域の人たちが大変な目に遭ったというのを大人の私達はテレビや話を聞くことで理解できますけれども、子ども達がそういうのを見たとなるとほとんど映画を観ているのと同じじゃないのかなと思えました。映画やテレビを観ているのと変わらないので

はないかなと。だからそれをどういうふうにも子ども達につなげていくか、うまく伝えていくかといったら、地元で、自分の地域に置き換えてやらなきゃ理解できないと思ったのがきっかけで、先日NHKでも放送していただいたのですが、松原の救護列車を伝える会の活動を起こしました。それと同時にその前から松原宿、寺子屋塾で子ども達に関わって子ども達に直接地域の人たちが歴史を含めて教えていくということも始めました。まず自分の地域のことを知る、歴史を知るとというのが根底にないと、震災のこともいろんな土地で起こっている戦争のこととかをうまく子ども達が理解できないのではないかなと思ったんです。だから地域教育というのは私にとってはすごく大切だと思っています。

松原の活動だけではなく、小学校の活動の中に「心もち運動」というのがあります。それは地域の人たちがどさっとやって来て一緒に餅つきをしたり、作った餅を近所の独居老人のところに皆が配りに行くという、半ば子ども会のような地域との携わり方もしています。そういうのもうまく広げられたらなと思います。

ただ、いつも思うのは松原のこの規模からできるのかなというのがありまして、富の原、竹小とかを見るとうまくできるのかなと思います。そういうことも考えながらうまい方向を見つけ出してやっていけたらなと思います。

それから、寺子屋塾で取り入れているのが本物の人に会うということです。たとえば新聞記者さんに新聞の作り方を教えてもらったりとか、めずらしい音楽家さんに来てもらって音楽を聴かせてもらうとか、画家さんに来てもらって絵の描き方を習ったりとか、本物に会うことでそれを近しく感じることでそういう人に自分になれるかもしれないというのがあります。

たとえば市長が寺子屋に来て、市長をすごく身近だと感じたら僕も市長になれるかもしれない、教育長が来たら僕も教育長になれるかもしれない

という可能性や夢を持たせるきっかけになっていると思います。

そういう身近に会わせていくというのをどんどん進めて行きたいなと思います。それが何かのサークルに入っていないとできないとか、親が主導的に頑張らないとできないというのではなくて、地域や教育委員会とかがうまく主導していくことでうまく広がるのではないかなと思います。とても難しいですがぜひ進めてください。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。

松原は色々特色ある地域教育をされているということで報道されることも多いですが、本当に規模の問題、市内全域に広げていく、広がっていくということを考えた時に重要な課題だなと思っています。無理をせず継続して広がっていくということが大事かなと思いますので、その辺しっかり考えながらやっていきたいと思っています。

そういった中でも地域の歴史・伝統尊重、多様な文化・価値観を学ぶ環境作り等々ありますが、先ほど竹小とか富小とかマンモス的なところもそうですけれど、そもそもここ30年近いのですが、そういったところで地域の歴史とか伝統を子ども達に伝えていくというところに協力をしていただけるようなことを考えていきたいなと思っています。そういったところは、佐古委員の周辺も含めてどういった形でやっていくことが一番浸透していくかとか何かご意見ございますか。地域の中で子ども達の学びを深めていくという歩みの時に。

佐古 順子 委員

西大村小学校でも餅つきがありました。寺子屋を夏と冬と、子ども会の方でしました。夏は皆さん地域の人たちがいろんな教室を開いてくださりまして、かなりの教室があったと思います。手芸教室とか習字教室、夏休みの課題をするような教室、ペットボトルの水ロケットを作る教室、木工教室、本当に地域の方達に頭が下がるような感じでした。PTAの方も一緒に協力されまして、最

後は皆でかき氷食べたりそうめん流しを食べたり、講師の方々にはPTAの役員がお昼にカレーを作ってくれたりとか。あとお菓子作りもしたり、冬にも冬の寺子屋ということで地域のかたやPTAの方がして下さって。やはり地域の方やPTAを巻き込むことですかね。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。

ぜひいろんな形で皆さん委員の方を中心として協力を広げていければと思います。PTAとかで協力をしていただけるというのが大事なと思います。上手にそこを巻き込んでいくということで江口委員何かご意見ございますか。

江口 真由美 委員

PTAを卒業して時間がたつので忘れちゃいましたという怒られますね。私は三城校区でさせていただいたのですが、特に町の中の小学校なのでごく地域活動が盛んでした。子ども会の加入率も20年前から数年前まで高く、私が住んでいる場所も100%に近い子ども会の加入率でした。

三城地区も割とそういう感じだったのが、年々希薄になってきたりということもあります。ただ、三城は市長を始め色々な方が頑張っているって、そこは地域がすごく活発です。子ども達がそういう大人、地域の頑張っているおじちゃん、おばちゃん達を見るということがまず大事なかなと思います。

先ほどもありましたけど、「園田君のお父さんが市長になられた」というところで夢とかあこがれというはすごく子ども達は身近に感じていると思います。

それと、去年の体育大会で郡に行ったときに、地域の方がすごく大村の歴史について語られました。「この偉人とかこの歴史をどうして伝えないんだ」ということをすごくおっしゃって、それは教育委員会の怠慢だと言われて、私も「そうですよね、こんなこと言っちゃいけないのですが、私が大村出身じゃないのでそこは本当に勉強しないと

いけないなと思っています」と言いました。そういう大村の歴史とかを誇りに思える子ども達を作るにはどうしたらいいのだろうと考えた時に、まず大人も知ることなんだろうな。方法としては、シートとかパンフレットとか子ども達が興味を持つようなものを作るのもいいのかな。それを共通で使って行って、たとえばそれを劇に使ったり、保護者、PTAで何か劇をしたりと、そのところから少しずつ取り入れて行って自分たちが住んでいるところを誇りに思えるような取組ができればいいなと思います。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。

これはしっかり地道に取り組んで行きたいなと思っているので、様々なご意見をいただきたいと思います。

勝手に私ばかりふって申し訳ないのですが、一つ注意しながらとか重要なところだなと思っていることで、永田委員お聞きしたいのですが、こういう地域の協力を当然PTAとか地域の方々と協力しながら、していただきながら、やっていかないといけないのですが、学校現場の先生方も一緒にやっていくのが大事なので、気をつけなくてはいけない点がございましたらご意見をいただければと思います。地域、地域とやってやるだけではうまくいかないと思いますので、よろしければお願いします。

永田 政信 委員

ますますグローバルな時代、社会になっていきますけれども、そういった外国の人たちとの関わりの中で言語、英語をツールとしながら色々な接触が出てくるのではないのかなと思います。学校の英語の授業もこれから様変わりしていきますよね。中学校では英語を基本にした授業が進められるし、高校ではもっと高度な英語、説明をしたり表現をしたり討論をしたりする授業になっていくのではないのかなと思います。そういった中で多くの外国人とつながっていく時に、言葉での

コミュニケーションだけではなくて、いろんなことを持ち合わせながら接触をしていかななくてはならないんじゃないかなと思います。人柄もそうだし、日本人として、日本の国としてというような、先ほど江口委員の方から誇りという言葉が出ましたけれども、そうしたものを持ち合わせながら接触をしていく必要があるのかなと思います。

やはり長期をみながらやっていかななくてはいけませんけれども、学校は限度があってできるものとできないものがあります。しかし、教育課程内のできるものが一つはあるでしょうし、学校とPTAが一緒になっての教育課程外の活動もできるでしょうし、そういったものを組み合わせていかなければいけないのかなと思います。

ただ、ある意味、学校、学校ということでも持ってこられたらそれこそ大変だな、パンクしてしまうなと思います。だから、教育課程内、教育課程外といったものの中で歴史であったり伝統文化を教えたり、日本の古典を含めた国語を大事にする態度とかをしっかりと学ばせていく必要があるのかなと思います。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。

その点は、本当に学校と協力をしながら、連携しながらやっていかないと、学校現場が大変な中そこに大きな負担や労力をとることになっていきますので、そこは十分注意をしながら進めていければなと思っております。

こういったグローバルな視点でということを含めて今後推進をしていきたいと思います。ぜひ、教育委員の皆様には先頭に立っていただきたいと思います。いろんな大人がいるよ、そしてこういう大人になりたいということで、ぜひ渡辺先生にも来ていただいて、そしたら医者になりたいという子ども達も出てくると思いますし、今ゲストティーチャーという形で学校で取り組まれているところもあります。そこら辺も含めた形で今後グローバルな人材育成という形の中での取組をして

推進をしていきたいと思いますので、今後ともよろしくお願ひしたいと思います。貴重なご意見をありがとうございました。

それでは最後の「4その他」ですが、事務局からお願いいたします。

市長公室長 大槻 隆

今後の会議開催予定でございますが、今年度は本日の会議を最後とさせていただきます。来年度、平成28年度につきましても3回程度の会議開催を予定しておりますので、後日あらためてご案内させていただきますたいと思います。以上です。

大村市長 園田 裕史

はい。ありがとうございます。

ご提案したテーマは以上ですが、皆さんからこれだけは今言っておきたいとか、これはどうなっているのかとかありましたら、お願いします。

私もこの総合教育会議に初めて参加をさせていただきましたし、せっかくですのでもっともいろいろなテーマにおいてもご意見をいただいて、私もしっかり勉強をしていきたいと思います。まだまだ未熟なのでぜひそこらへんをご指導いただきたいというところで、ぜひ教育を通じて、私に直接でもかまいませんのでいろんなご意見を届けていただければありがたいなと思っております。

それではここで進行を司会に戻したいと思ひます。本日は貴重なご意見ご提案等をいただきまして誠にありがとうございました。

市長公室長 大槻 隆

以上をもちまして、平成27年度第3回総合教育会議を終了いたします。

本日は誠にありがとうございました。

一同

ありがとうございました。